

GE2～神喰いさんの日常的な～

瑞桜

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

世界を喰らう災厄、荒神

その神を喰らう人ゴツドイーター

——これは終わらない戦い、神と人の闘争の物語

#この話は本編にはない話です、主人公はオリジナルで、それ以外の人物は原作と同じと思ってください、またキャラの印象等イメージが違う場合あるかもしれません。ご容赦くださると嬉しいです

婦
投

目
次

1

帰投

#1 とある神喰いの帰宅（?）

ふくんふくんふくん

どこからか鼻歌が聞こえる

ふぶんふぶん……っだああああっああああっつかれたあああああ
………

……などと思っていたのは間違いだったようだ

盛大なため息をついたのはリン、ブラッドの隊長であり、フェンリル極東支部の神器
使いでもある。

「つてかさーなんでさー！ソロで任務行かなきゃいけないのおお!!」

などと愚痴をこぼしているが……結局は彼女自身の気分で行ったのであり行かな
きゃいけないというわけでもないわけで……

「はあ……ほんつとつかれた……なにしよ……」

と、とほとほと自室に足を進めていくのであった……

そしてその後なにしようと言っていた割にはぐーすかと眠るのは本人も知らない……

#2 神器使い達

「……………はっ、寝てたの私」

起きたのは帰投完了後五時間、時刻で言うところ午前三時である。

「うあー、なにこれ……シャワーかな……」

とりあえずベッドから体を起こし適当にタオルと服を見繕ってシャワー室に持つていく

「……………楽そうだしこれでいっか」

と言いつつリンが手にとったのは浴衣である、楽……なのだろうか、楽なんだろうそういうことにしよう。

くくシャワー室くく

「あ、アリサさん」

シャワー室につくとアリサがいた、シャワーを済ませて着替え終わった様子に見える。

「アリサさーん」

特に何か用事があるわけでもないがなんとなく話しかけてみる……と、アリサは肩をビクッと震わせて。

「は、はいっ！なんですか!？」

…なんで慌ててるんだろ

初めは警戒してなかったのかカーテンを閉めていなかったが、リンが声をかけると途端にカーテンを閉めてしまった。

…これは、何か…

面白そうな予感がする！

そう直感したリンは足音を殺してアリサの使っている更衣スペースに近づいていくと

シャツ！

と思いつきりカーテンを開けた

そこで勢いよく振り向いたアリサとバツチリ目が合う。

「…ッ!？」

初めは突然のことで何が起きたかわからないで目を白黒させていたアリサだったが、流石は元・第一部隊、現『クレイドル』所属の歴戦のゴッドイーター…というべきなのだろうか

アリサの右手が閃いたかと思うとぽふっ、という音と共にいきなり視界を塞がれる、どうやらタオルを投げつけられたようだ。

「うわあ!?!」

完璧に油断していたため、リンはそのまま後ろの倒れ…床に頭を打ち付けた。

「あうっ!……アリサさん……いたた……」

とりあえずタオルをどけようと…したところで。

「見ないでください!」

アリサに顔を押しさえつけられる、タオルごと、しかも鼻と口が塞がって息ができない、苦しい。

「~~~~~!!」

声にならない叫びをあげながら手足をバタバタと動かす、しかし解ける気配はなく…更に抵抗したことで押しさえつける力が強まってしまい逆効果に……

(アリサさん可愛いなあ……)

朦朧とする意識の中、そんなことを考えながらリンは意識を手放した。

#3 出撃《モーニングコール》

目を開けると真つ白い天井が飛び込んできた。

気絶したリンは…まあ当然のごとく医務室に運ばれて寝かされていた。

起きたのは午前七時、気絶した——厳密にはさせられたになるが、その時刻が大体

午前三時過ぎなので四時間近く眠っていたらしい。

「あー………寝すぎた……」

まだ眠たく、半開きな目を擦りながら大あくびを一つしたところで。

「おーおー結構なご身分ですなあんんー?」

……やたら喧嘩腰な声をかけられた、声自体は毎日のように聞いているので誰かすぐわかる。

「あんたこそ朝っぱらから医務室来て何してんだって話になるけど?」

半眼になりながらお返しにと返す。

「ハラが痛くてよ、薬もらいにきただけだ……そんでなーんか寝てるヤツがいるし? そう思ったら大あくびしてるし? 声かけてみただけですが?」

「いっちなんでそんな喧嘩腰なのよあんたは……はあ」

「いいじゃねえか、最近こうやってのんびりしてる時ってなかっただろ?」

けらけらと笑う彼の名前は、同じ極東支部の神器使いで名前はユウ、リンと同一年で同期、新型神器使い……等、接点は色々ある、初めに配属になった部隊も同じだ。

その部隊の名は——《ブラッド》

血の力を以てアラガミを喰らう部隊。

……とは言っているが実際には彼らもまだ十代そこそこ、普通にしていけば昔の《学生》

と呼ばれる集団と何ら変わりはないのかもしれない。

「まあ、確かにそうかもねー、任務行つて帰投して任務行つて帰投し……任務ばつただけつて何なのよ……」

「ま、それが俺らの役目つてもんなんじやん？人類のために闘うー！みたいなさ」

「配給と給料の分はねえ！」

「最ツ低だなお前!？」

「冗談だよー、外周区には知り合いも、仲間の家族もいっぱいいるし、そうじゃなくても……ゴッドイーターになつたんなら守らなきゃね」

「違いねえ、そうじゃなきゃ……こんな戦場にいる意味がないもんなあ」

「つていうかお腹すいた、何か食べよ？どうせ暇でしょあんたも」

「じゃあお前のオゴリな、そうと決まればさつさと——」

『緊急連絡です！対アラガミ装甲を破つてアラガミが侵入！数はオウガテイルなど小型が五匹ほど、中には中型種の反応もあります！現在、手が空いている人は防衛に当たつてください！』

アラガミ、それは世界を喰らう災厄

そして、人類の敵である

「……飯はまた今度な」

「朝ごはん抜きかあ……つら……」

「いいから行くぞ、もう平気だろ?」

「平気、いけるよ」

世界を喰らう災厄——それは荒ぶる神々に例えられ、《荒神》と呼ばれる。

その荒ぶる神々を喰らい……狩る者達《ゴッドイーター》

この世界はヒトとカミの闘争の世界

二人は医務室を飛び出し昇降口を上がる、手早く準備を済ませ《神器》を肩に担ぎ駆けていく。

そして、それぞれの決意を胸に戦場へ——